清宗根付館 便り

当館では、作品の蒐集と同時に作家との交流にも努めております。今回は、2022年10月 8日(土) に行われ、第28回目を迎えた京都 清宗根付館主催の作家の集まり「根付の夕べ」についてご報告させていただきます。
根付の夕べでは、当館の活動実績や今後の予定について作家の皆様に館長から報告します。その後には、作家がご自身の新作を持ち寄り、作品の解説や苦労した箇所、さらには作品の見どころなどを、館長や私たち学芸員に作家自らお話していただきます。館長は、約50年に及ぶ蒐集家としての観点から、次作品を制作する際の課題を出したり、構図の提案をしたりし、作家の皆様へ新たな挑戦を促したりしています。

そうした交流により作家の方々は明確な目標を持たれ、意気込みも新たに取り組まれるそうです。加えて色々な彫歴を持った作家 20名の方々が参加されており、制作技法や活動状況など、作家同士の活発な情報交換の場所としても今回の根付の夕べを活用していただいておられました。
そして私たち学芸員は、こうした機会で得られた情報を活かして作品展示や資料の整理に役立てております。京都 清宗根付館は、作品を展示するだけの箱に留まらず、根付文化の継承と発展という大きな目標を掲げ、今を生きる作家と、『根付』を愛でる全て方々の架け橋となれるよう今後も努力していく所存です。

根付研究 最前線『現代根付の源泉』

公益財団法人 京都 清宗根付館
学芸員 大西 弘祐(忠雲)

筆者は、能楽の大成者である世阿弥［1363～1443］の能をめぐる美学のうちに、現代根付を捉えています。世阿弥は、大衆の芸事である「物まね」(写実性／俗)を、宮廷文化の理想を表した和歌の世界である「幽玄」(虚飾を排した世界／雅)に、いかにして引き上げていくか、換言すれば、高次な精神性を理想としながらも、しかしその根源は物まねであるという、ここに引き起こる二律背反を融合させるなかで、芸事を大成させました。
根付も同様に、写実的で分かりやすい、しかし、これだけには収まりません。現代根付の俊逸な作品は、単なる快・不快の感情の表層に留まらず、じわっと、私たちの内奥に突き刺さってきます。時にこれは、私たちの想像力に強く働きかけてくるものでものであり、時に、言葉では囲いきれない、拡散しあるいは凝縮していく感情であったりもします。
現代根付が、私たちの内奥に突き刺さる時、ここに、『風姿花伝』にある「花を知らんと思はば、まず種をしるべし」という世阿弥の教えを思い起こさせます。花は環境によって、つまり、担い手と場によって咲き方が変ります。なお、この点については別稿に譲りますが、いずれにしても、美しい花を咲かせるには、何はさておき、美しい花を咲かせる種でなければなりません。鬼は「巌に花の咲かんが如し」、また老人は「老木に花が咲かんが如し」とあるように、本質を見極め、これを表現しようという透徹した姿勢がなくては叶いません。同時に、これは、「撫子の露に濡れたるよりもなよび」、また「女郎花の風になびきたるよりもらうたく」といった、中古文学に表された、美しさを例える言説と同様に、美しいと感じる（あるいは感じさせる）心性が、<自然>に対する心の動きに根差していることを、改めて、気付かせてくれます。本質を見極め、また美しさを表そうとする表現が、自然を前にした能動的ないし受動的に引き起こされる人間の根源的な感情にもとづいているがゆえに、俊逸な現代根付もまた、私たちの内奥に、言うなれば、拠って立つ「土台」そのものに響いてくるのでしょう。
また、これまでの文学研究に添えば、「幽玄」に連なる「あはれ」という、対象と共に移り行く心性と、またこれと対比をなしあるいは補完する、対象を知的に対象化して観照する「をかし」という心性が、中古文学を代表する美的理念であったと言われています。世阿弥もまた『習道書』において、「幽玄」を理想とし、しかも「笑みのうちに楽しみを含む」ような「幽玄の上類のをかし」を目指すよう狂言役者に説いています。この「幽玄」の内にある「をかし」という心性、言うなれば、対象に対する知的な<発見>こそが、後に、江戸時代となって発現する、機知に富む根付の世界の端緒であり、現代根付に脈々と息づいている、根付そのものに秘められた普遍的で創造的な力の源泉なのです。現代根付もまた能・狂言の世界に連なりをもち、能・狂言と同様に、「俗」と「雅」、「現実」と「理想」の二律背反を、「咲」という笑いを媒介に、高次に融合させようという試みとして、捉えられるのではないでしょうか。

＊拙稿は神林恒道先生の「花の美学 - 世阿弥の芸術論をめぐって -」（日本美術教育学会／2016）を基にし、また、『ネットミュージアム兵庫文化館』の研究成果を参考にしています。
＊世阿弥著、奥田勲他校注、『風姿花伝』・『習道書』、日本古典文学全集 88、小学館、2001

2023年 4月～6月の特別企画展のご案内　現代根付の変遷 ～ 根付は時代を閉じ込めたタイムカプセル ～

4月「継承と革新」展
■4月1日(土)～30日(日)

5月「多様化と表現」展
■5月2日(火)～31日(水)

6月「転換と再構築」展
■6月1日(木)～30日(金)

京都 清宗根付館　公式ホームページのTwitter、Instagram にて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第9回 水木十五堂賞受賞（奈良県大和郡山市より授与）
家庭画報(目次頁)に毎月掲載、NHKプレミアム「美の壺」出演

公式サイトはこちらから▶

コロナウィルス感染症による感染拡大防止への取り組みに関して
・入館時にスタッフにより、非接触による検温と手指のアルコール噴霧をいたします（37.5度以上の発熱がある場合は、入館をお断りさせて頂く場合がございます）。
・万が一、コロナウイルス感染者が発生した際の対策のため、入館時に住所・氏名等のご記入をお願いしております。
・マスクの着用にご協力をお願いいたします。当館スタッフもマスク着用で業務にあたらせていただきます。

公益財団法人 京都 清宗根付館 とは

当館は、佐川印刷株式会社 代表取締役会長 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね（宗）とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、<魅せる><育む><繋がる>を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。

SAGAWA PRINTING
佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。

宗 現代根付 Contemporary Netsuke Newsletter Salon

WINTER ~ SPRING　Issue. 11

［目 次］
■企画展の見所
■清宗根付館便り
■根付研究最前線

［発行元］
公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地(壬生寺東側)
電話 075(802)7000
www.netsukekan.jp/

日本橋　文化庁 京都へ

日本で唯一の現代根付専門美術館　京都 清宗根付館『企画展』のご案内

人のいとなみに寄り添う根付『根付風物詩(ねつけふうぶつし)』展

根付に宿る豊かな抒情性は、四季の移ろいを愛でる風土と日々の生活に目を向ける美意識によってもたらされます。明るい知的な美を「をかし」、しみじみとした情緒美を「もののあはれ」と表現するなど、「美」に対するきめ細やかな感性によって見出されてきました。そうした美意識は日本人の自然観に由来しているとされます。時には穏やかに、時には激しい自然に畏怖を感じ、人智を超えた神を見出してきました。また時がうつろう無常の境地に儚い美意識を重ねました。日々の暮らしに美意識をにじませながらも、「大きく、力強いもの」よりも、「小さく、愛らしいもの」や、「縮小されたもの」に対して「美」を感じてきた歴史があります。

根付の「縮小した世界観」もそこから生まれてきました。小さいものに万物の摂理を、何気ない日常品に永劫の真価を看取できることが根付の魅力と言えます。
展覧会では「根付風物詩」をテーマに、人のいとなみに寄り添う根付たちを紹介します。
1月は「根付の神様」展と題して、暮らしに息づく八百万の神々を勧請し、新年を寿ぎます。2 月の「根付の食卓」展では、食卓を囲む団欒の賑わいを味わいのある根付でご覧ください。3月の「根付歳時記」展と題して、春夏秋冬を巡る根付の季節感をお楽しみください。

告知ポスター

2023年1月～3月 企画展の見所 ※掲載の根付は原寸サイズです

1月 めでたき八百万（やおよろず）の神が大集合
■ 1月6日（金）～31日（火）

「根付の神様」展

年初は八百万の神々を勧請し、新年を寿ぎます。古来より神霊には荒魂（あらみたま）と和魂（にぎみたま）の表裏の働きがあり、やがて幸魂（さちみたま）と奇魂（くしみたま）を加えた一霊四魂（いちれいしこん）による多面的な働きで物事を成就させるとされました。日本では古事記に登場する神をはじめ、天を仰げばお天道様、自然を眺めれば山の神や田の神たち、人為に尋ねれば門や柱、台所、古道具にまでも、あらゆる処に八百万の神がおはしまし、人々の営みと同居してきました。霊験あらたかな根付の神様をお迎えし、諸願成就を祈念します。

岸 一舟（1917～）
「福の神」 高5.2cm
象牙

人々に幸福や利益を授ける神として古くから祀られてきた神。笑顔を周囲に授け富貴に導く。

永島 信也（閑溟）（1986～）
「スセリヒメ」 高5.4cm
鹿角

古事記に登場し、スサノオノミコトの娘で、オオアナムヂ（のちのオオクニヌシノミコト）の妻となる。

高木 喜峰（1957～）
「アマテラス」 高3.5cm
ブルーアンバー・黒檀・銀

天岩戸伝説には鬼界カルデラ大噴火を示唆する仮説もあるが、ダイナミックなスケール感を感じさせる作品。

平賀 胤壽（1947～）
「紗亜曼」 高6.2cm
象牙・べっ甲・貝

神を祀り、神意を人々に伝える巫女（みこ）とされる邪馬台国の卑弥呼を題材にして、神の加護があることを願って。

田神 十志（1957～）
「笑気呼光」 高4.3cm
黄楊

天岩戸伝説よりアメノウズメの踊りによって神々の笑いが響き、アマテラスも誘われて、再び光が戻った。

2月 食をいろどる　味のある根付
■ 2月1日（水）～28日（火）

「根付の食卓」展

いつの時代も、どの場所でも変わらない幸せのひとつは食事です。日常を彩り、賑わいを与える食卓を中心に料理を題材にした根付を紹介し、日々の暮らしに眼差しを向けます。自然の豊かな食材は、多様な食文化を築いてきました。とくに家庭料理は代々伝えられ、記憶に残る家庭の味に誰もが懐かしさを覚えることでしょう。食事はその時の状況や団欒の記憶と結びつき、本人だけの特別な思い出となります。根付でもそうした情景を連想させる留守模様※の作品を一堂に集めました。日常に潜む幸せを思い出させてくれる根付をご覧ください。

※留守模様とは登場人物を描写しないで象徴となる小道具などで連想させる手法です。

桑原 仁（1956～）
「江戸前」 高4.1cm
黄楊・象牙

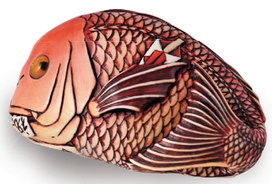
かつて江戸っ子がすぐに食べられるようにと広がった江戸前寿司。一手間かけた職人ならではの旬の味を召し上がれ。

落合 雅（1977～）
「五菜色篭盛」 高4.2cm
象牙

東洋思想の根幹をなす陰陽五行では野菜も五色に分けられた。篭に盛られた五種類の夏野菜の瑞々しさ。

落合 尚（1972～）
「庭宴」 高4.2cm
象牙・鯨骨

屋外での茶会は野点（のだて）と呼ばれ、花見や紅葉狩りなど季節の移り変わりを楽しむために行われてきた。



向田 陽佳（1968～）
「祝鯛」 高3.3cm
象牙・べっ甲

慶事には欠かせない鯛は縁起のいい高級魚として日本の食卓には欠かせない食材。折りのしで祝いのしるしに。

和地 一風（1970～）
「特別な日」 高4.2cm
鹿角

誰にでも思い出に残る特別な日があるはず。そんな日にはケーキが似合う。よく見るとケーキに松竹梅のモチーフが。

3月 こころが謳（うた）いだす　風流な根付
■ 3月1日（水）～31日（金）

「根付歳時記」展

日本人は季節ごとの行事や習慣、風物を大切にしてきました。とくに季節の到来や節目に寄り添い、旬をはしり、さかり、なごりと分けるなど、その時節を楽しむ繊細な美意識によって季節感を大事にしてきました。根付においてもその旬を題材に採り入れ、また季節の特徴を切り取った様子はまるで歳時記のようです。季節ごとの情趣を楽しむ風流と季節の到来を尊ぶ行事には祖先を敬い、自然に対して感謝する「おかげさま」の心が息づいています。根付にも受け継がれてきた日本人の心を浮かび上がらせつつ、春夏秋冬の風物詩を巡ります。

庄司 明幹（1936～）
「メジロの好物」 高3.9cm
象牙

メジロは花の蜜を好むので、早春の椿や梅の花のそばで見かけることができる。里山ならではの風景。

及川 空観（1968～）
「床ぴらき」 高4.0cm
象牙

蒸し暑い京の夏を風流に遊ぶ納涼床。川面の吹く風が心地よく、芸者と旦那の酌み交わす酒も進みそう。

黒岩 明（1949～）
「夕顔」 高4.4cm
黄楊・漆・象牙・ダイヤ・銀

源氏物語の中でも佳人薄命で印象に残る夕顔。源氏と出会いとなった夕顔の花を蒔絵と象牙彫刻で再現している。

宍戸 濤雲（1960～）
「酉の市」 高4.3cm
黄楊

江戸の年末に威勢良く手締めが響き渡る大酉祭（おおとりまつり）。縁起熊手で福を「はき込む、かき込む」と商売繁盛を願う。

針谷 祐之（1954～）
「大寒」 幅3.3cm
桐・象牙・漆・貝

一番寒さが厳しくなる時季。このあと三寒四温が続き、春の気配が感じられるようになる。